

南部アフリカ牧畜民と家畜との関係についての調査

アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程 1年

藤田 翔

ナミビア

2017年8月7日～2017年10月30日

計画の概要

申請者は今後博士予備論文・博士論文を執筆するにあたって、調査地としてナミビア共和国を、調査対象としてそこで牧畜を生業にしていると考えられてきた「ナマ」と呼ばれる民族集団を想定している。ナマとその家畜との関係の文化人類学的な理解から、より抽象的な次元での人間と動物との関係の正確な把握を目指している。

今回の渡航はナミビアへの初めての渡航であるため、①今後本格的に調査を進めていけるような調査地を探すことと、②現地語である“Khoekhoegowab（「コエコエ語」）」の習得をまず目指した。そしてそれらと並行して③基礎的な情報として滞在した場所の親族構造、社会組織、経済活動や他の場所との交流の状況の把握と、ナマの人たちの動物観を理解するため、動物に関する語彙の収集やテープレコーダー等を用いた日常の詳細な記録の採取を計画していた。

成果

まず調査地については、実際の移動距離と比較的大きな都市へのアクセスの問題から、当初予定していた Berseba（ベルセバ）とそこから比較的距離の近い Tses（ツェス）、Gainachas（ガイナハス）の三つの町村に候補を絞って探していった。この三つの町村にそれぞれ二週間～一ヶ月滞在し、治安と牧場へのアクセスを考慮した結果、Gainachas を今後の暫定の調査地とすることにした。この村では今後滞在スペースを提供すると申し出てくれる人や、所有する牧場へ調査に行くことを許可してくれる人と出会う事が出来た。

次に現地語の習得については、現地で日常的に用いられていたコエコエ語を理解しようと試み、自ら利用しようと努めた。日本から持参した辞書と参考書を用いて学習も行った。また現地の学校へ出向き、日本では入手の難しい学校で実際に使われているコエコエ語の教科書（初級～中級程度）や詩集のコピーを入手し、可能な時は低学年向けに行われていた基礎的なコエコエ語の授業に参加した。コエコエ語の教師に頼み、コエコエ語におけるアルファベットを一つ一つ発音してもらい、その音声のボイスレコーダーを用いた記

録も行った。こうした結果、渡航期間の後半には挨拶や簡単な質問への受け答えが出来るようになった。完全な理解ではないがコエコエ語の基本的な文章構造を自分なりに把握出来、いくつかの単語や動詞、フレーズを記憶することも出来た。今後も継続して習得を進めていく必要があるが、教科書等のコピーの入手はこれから利用可能な学習用の素材を増やすことにつながった。

現地の状況の把握とナマの人たちの動物観の理解については、現地語での意思疎通がまだ困難であったため深く理解出来てはいないと考えているが、現地の状況についてナマの人たちの日常生活の様子や食生活、現在の彼らにとっての牧畜を概観することが出来た。また貧困、失業率の高さ、飲酒、喫煙、暴力、差別といったいくつかの問題を今回滞在したどの村でも抱えている事がわかった。当初予定していた親族構造や社会組織、経済活動などの調査については、自分に対する現地の人たちの対応や様子からこういった調査を今回行うことが困難であるように感じられ、満足に行うことが出来なかった。今回の渡航では、まずは村の人たちとなるべく同じような生活をするよう心掛け、彼らに受け入れてもらえるよう努力をしていた。生活を共にする中で「友人」と呼べるような存在や、前述したように今後の滞在場所を提供してくれる人、牧場での調査を許可してくれるような人たちと出会うことは出来た。

動物観については、今回の渡航では基本的に村から遠く離れる牧場に長期間滞在することが出来なかったが、機会を見つけて放牧の手伝いや、ヤギ・羊の解体場面への立会い、スマートフォンのビデオ機能を利用してその記録を取るなど行い、動物と接する際のナマの人たちの様子を観察・記録することは出来た。また、毎食と言って良いほど動物（家畜と野生動物）の肉を良く食べるため、生活を共にする中で肉の嗜好や考え方などを聞くことが出来た。



写真 1 Gainachas



写真 2 教科書

(Zimmermann W, Haacke W.H.G, Boois J, 1977, Iikhalikhasen da ge ra Namagowaba. Inboorlingtaalburo van die Department van Bantoe-onderwys.)



写真3 牧場